

説明	検査項目	検査の意味
①	75gブドウ糖負荷試験	ブドウ糖負荷前と1、2時間後の血糖を測り糖尿病の診断をする検査。判定基準では1、2時間後の血糖が200以上あれば糖尿病（型）で治療の必要、2時間値が140～199の場合は境界（型）で要注意とされています。
⑧	白血球分類	主に5種類に分かれる白血球の割合を調べ診断の参考とします。感染症、血液疾患などで異常となります。
⑨	尿比重	尿比重は尿中の成分や飲水量、発汗量などでも変動しますが、極端な低比重は腎機能障害が疑われます。
	尿PH	尿PHは食事や運動等に左右されますが通常弱酸性です。極端な酸性尿やアルカリ尿では異常が疑われます。
	尿沈査	尿を遠心分離して沈殿する成分を観察します。赤血球が多い時は腎・尿路の炎症・結石・腫瘍などの可能性が、白血球が多い時は尿路感染、円柱が多い時は腎臓病、上皮細胞が多い時は膀胱炎、尿道炎などが疑われます。
⑩	LD(LDH)	肝臓、腎臓、筋肉、赤血球等全身に広く分布する酵素。高値では、肝疾患、心疾患、血液疾患等が疑われます。採血時の溶血などでも軽度上昇することがあり、他の酵素と併せて診断することが必要です。
	総ビリルビン	ヘモグロビンの代謝産物で、胆汁色素の主成分。値が高いときは、肝・胆道疾患、溶血性貧血等が疑われます。他の血液検査に異常がなく総ビリルビンのみ軽度上昇のときは、体質性黄疸で心配のないこともあります。
	コリエステラーゼ	肝臓で合成される酵素のひとつ。低値では肝疾患、高値では脂肪肝や腎疾患、甲状腺疾患など疑われます。
	LAP	様々な臓器や胆汁中に存在し、肝臓や胆道に障害があるときに上昇します。妊娠時、成長期には高めになります。
⑪	血清アミラーゼ	膵臓や唾液腺で作られる消化酵素のひとつ。値が高いときは、膵臓疾患や唾液腺疾患が疑われます。
⑫	血清総蛋白	血清中の蛋白質の総量。低値では肝臓病、ネフローゼ等が疑われ、高値では脱水、多発性骨髄腫等が疑われます。
	アルブミン	肝臓で合成され、血清蛋白中最多を占める蛋白。栄養不足や、肝臓や腎臓に障害があるときに低値となります。
	A/G比	血清蛋白中のアルブミン（A）とグロブリン（G）の比で、低値では肝疾患や感染症・膠原病等が疑われます。
	ZTT・TTT	γグロブリン（グロブリンの1種）を反映する検査です。高値では肝疾患や慢性感染症・膠原病等が疑われます。
	CRP	炎症や組織の破壊によって血清中に増えるタンパク質の一種。高値のときは炎症が疑われます。
	ASLO(ASO)	A群溶血性連鎖球菌感染で上昇し、咽頭扁桃炎等の感染症の他、腎炎、リウマチ熱等が疑われることもあります。
	RPR	梅毒に感染しているかを調べます。但し、結核や膠原病、肝疾患など梅毒以外でも陽性を示すことがあります。
	TP抗体	梅毒の血清学的診断を行う検査です。但し治癒後も陽性が持続するため過去の感染の可能性もあります。
	血清鉄	血清中の鉄は骨髄に運ばれ赤血球の材料となります。貧血や慢性感染症・悪性腫瘍等で低くなります。
⑬	蛋白分画	電気泳動で血清蛋白の種類を測るもので、肝、腎の疾患、感染症、骨髄腫などの診断に役立ちます。
	ペプシノーゲン	胃壁から分泌される酵素を測定し、その値を解析して胃粘膜の萎縮の度合いを表します。萎縮の程度と胃がんの発生率に関係のあることが知られていますので、（+）以上の場合は胃部内視鏡検査を受ける必要があります。
	Na(ナトリウム)	血清電解質の種類。異常なら体内の水代謝異常、あるいは腎機能障害などが疑われます。
	K(カリウム)	腎臓、消化管吸収、細胞内外分布等で調節される血清電解質で、種々の原因で異常をきたします。
	Cl(クロール)	血清電解質の種類。異常なら体内の水代謝異常、あるいは腎機能障害などが疑われます。
	Ca(カルシウム)	副甲状腺機能亢進症・悪性腫瘍などで高くなり、副甲状腺機能低下症・慢性腎不全などで低くなります。
	P(無機リン)	副甲状腺機能低下症、慢性腎不全などで高くなり、副甲状腺機能亢進症などで低くなります。
	麻疹ウイルスIgG(EIA)	麻疹（はしか）、風疹、ムンプス（おたふくかぜ）、水痘（水ぼうそう）のウイルス抗体価。 （-）、（±）では感染する可能性が強く、ワクチン接種が必要です。（+）は抗体はあるが、麻疹、風疹などでは、「陽性」＝十分な抗体価とは限らず注意を要します。医療従事者や妊娠希望者では、より厳しい基準（麻疹16未満、風疹8未満）などでワクチンが勧められますので、医師に相談してください。
	風疹ウイルスIgG(EIA)	
	ムンプスウイルスIgG(EIA)	
水痘・帯状疱疹ウイルスIgG(EIA)		
⑭	眼底検査	緑内障など眼科的疾患のスクリーニングに有用である他、動脈硬化、高血圧、糖尿病など全身疾患による血管変化の情報を得ることができます。H（高血圧性変化）とS（動脈硬化性変化）は0～4段階で異常を表現します。
⑮	呼吸機能検査	努力性肺活量、一秒率、%一秒量などを調べます。間質性肺炎、肺手術後などでは肺活量が低下しやすく、喘息やCOPD（肺気腫等）では、一秒率、%一秒量が低下しやすくなります。
⑯	喀痰細胞診	喀痰細胞診検査ではクラス分類で良悪性を表現します。Iは正常、IIは良性、IIIは異形成を認め再検や経過観察を要するもの、IVは悪性が疑わしいもの、Vは悪性と想定されるものを示しています。
⑰	胃内視鏡生検（組織検査）	胃内視鏡時の胃組織検査。Iは正常または炎症などの非腫瘍性病変、IIは腫瘍性か非腫瘍性が判断の困難な病変、IIIは腺腫、IVは悪性腫瘍が疑わしいもの、Vは悪性腫瘍と判断されるものを示しています。
⑱	ABI PWV（動脈硬化検査）	ABI（足関節上腕血圧比）は足首と上腕の血圧比で、基準より低い場合は下肢の動脈の狭窄または閉塞が疑われます。PWV（脈波伝播速度）は心臓の拍動が動脈を通じて手や足に届くまでの速度で、動脈硬化が進むと亢進します。
⑲	心臓超音波検査	心臓に超音波をあてて心臓の形や動き、血流などを調べます。心臓弁膜症、心筋梗塞、心筋症などの診断に大変有用な検査です。FSとは左室内径短縮率のことで、左心室収縮機能の指標となります。（FSの基準値28～45%）